

幻椀久

へ榮華は昨日の夢さめてうつゝに迷う今日の身は法師ほう師は木のはしと
思うは野暮よ分知らず心の花の色も香も知らせたいぞやはつちはちへいつの頃より
逢い初めて愛しいとしのその末の末の松山思いのたねよ今は心も乱れ候さりと
はく死のうかのエエどうともせとかく恋路の濡衣ほさぬ涙の露の玉

「これは御存知のはつちはち衣は墨に染めれどもまだ加羅の香は

消えやらぬ傾城買いのなれの果て

へ粹法師のはつちはち椀久法師のはつちはち

「フゝゝゝ、ハゝゝゝ、ヤ何やら聞こゆるオオ騒ぐはく洒落居るわ

こりゃとんと面白そうじゃわいどれ我等もそれへ推参申そう

へ狂い乱れて他愛なく松を目当てに来たりける

「ヤ、松ぢゃく、オオ太夫ぢゃく、松山太夫であつたよのう

へ我身は姿かわれども変らぬ松のみどり濃き色もなつかしなつかしの君がかん
ばせたゞ一ト目見たい逢いたい恋しさのこうじこうじてものぐるい

「椀久さんようござんしたなア

「オ太夫か久しやく久し振りの逢瀬にヤそちや菊市その盃は

「お氣に入りの廓八景時絵の大杯

「オオでかすサこれへ受きようヤ甘露くこりゃとんと昔じゃ

昔ながらの菊市の三味も久しいのうサ唄え聞こうぞ

へ君は花かや花なら散るに秋の紅葉の色まさる日数積もれば色増さるへ梅の匂
いを桜にかして君のたぶさにささせたや青葉のままに眺めたや

「ヤア面白いくこれ太夫面白いと言うもそなたに逢うた束の間の楽しみ

へこの椀久は過ぎし頃破れし袖の恋衣ぬいで別れしその後は蓬の宿にただ一人
へ床離れ行く暁のそのきぬくの面影を問えど答えずしよんぼりと昨日は今日
の昔にてそも我ながら浅ましやへのうそのかこち言我もまた同じ思いの宵ごと
に月に便りを松山の浪越すばかりうき涙願い叶いしこの逢瀬乱れし糸の破れ衣
恋も情も捨法師 変わり果てたるなりかたち おんいたわしのお姿やとたださめざ
めと泣くばかり

「そのお嘆きもこうお逢いなされる上は御無用くサこの上は昔の通り

「ほんにそうじゃわいなア今更言うても詮ない事

へ伏屋の軒に見る月も廓の窓に差す影も光は同じ法の徳姿形は変われども心ご
ころは二世三世 変わらぬ色と誓いてしへ言の葉ぐさのいちくに忘れかねては
繰り返す千束の文の数々をそらで覚えて候かしこ

「さあ出来たこれで御機嫌が直つたわ松風さん繁野さん

サア華車どのもここへ太夫様と椀久様の御機嫌が直つた祝いに

わつさりとやりかけましょうか

「オオ菊市よう気が付いて給つたソレはなじや皆にやりや

へ花と雪とはどれが吉野の眺めやら花やら雪やらどれが吉野の眺めやらへ松と浪
とはどれが露やらしぶきやら別れの袖にはどれが露やら涙やらへどれが松やら松
山の姿もさとの夕暮もありしかたちは幻の寄らんとすれば頼りなく縫らんとす
ればうたかたの消えて残るは松風かむせぶが如き浪の音へ泣いつ笑いつ狂乱の
狂い疲れて足立たずへ芝をしとねに伏したるは目もあてられぬ風情なり